



イメージ



川崎ゆきお

想像したものと、実際のものとは違うことがある。実物や、その現実を直接見ていないのだから、当然だろう。

ただ、想像していたものの方がよく、実際はそれより劣ることがある。ではいったい何を想像していたのだろうか。

「誇大妄想じゃないのかね」

「いえ、過小妄想することもあります」

「過小妄想？」

「過小評価でしょうか。小さい目、少ない目に想像することがあります。これは妄想ではなく、普通だと思うのですが」

「まあ、実際のものを見ていないのだから、多少は食い違うだろうが、それはある範囲内だ。それを越えると妄想になる」

「その境界線は何でしょう」

「期待とか、不安とかの空気が膨らませたり萎めさせたりするのだろうねえ」

「先生にもありますか」

「当然だよ。テレビで見ていた観光地の映像と、実際とは違ುದろ。陸上競技場へ行ってみると、意外と小さくて狭い」

「ああ、それはレンズのせいですよ」

「いちいち広角か標準か望遠かと思いながら見ていないからね。だが印象だけは残る」

「観光地なんて、いいところだけを切り撮ってますねえ。あれを見ていると、町全体があんな感じかと思ってしまう。でも、それにはもう騙されませんが」

「商品もそうだね。ネットで写真だけを見て、買ったものが、思っていた感じではない。確かに重さや色や材質や寸法も知っているのだがね。しかし、十センチのものが二十センチになっているわけじゃない。ある範囲内での話だ」

「じゃ、問題は感じですか」

「商品なら、誤差はそれほどないだろうが、事柄に関しては誤解が多く出るだろうねえ」

「たとえば」

「履歴書で見た人と、実際に会うと、全く違う」

「写真も貼られていたのでしょ」

「悪い写真は選ばないだろう。確かにその人の一面ではあるが、そういう顔になることは一度もなかったねえ。いったいどうやって写したのかと思うほどだよ」

「自分と世間との食い違いもありますねえ」

「それは、君が思っている世間と実際の世間とが違うためだろうねえ」

「僕が思っている世間ですか。それって一般的な世間だと思うのですが」

「だから、それは君が思っているところの一般的なものだ」

「ああ、そうですねえ。普通に見ているようでも、結構フィルターをかけてますねえ」

「だからイメージが大切だ」

「そのイメージが一番曖昧なんですよ」

「だからツボにハマると決まる」

「怖いものですねえ。イメージって」

「まあ、人はイメージなしでは生きていけないからね」

「はい」

「普通のイメージが妄想になるのはすぐだ。特に一つのことをじっと見つめていると、危ないからね」

「あらぬものが沸き出すのですね」

「まあ、それを楽しみとして沸かすのなら、いいんだけど」

「そうですねえ。どうでもいいことなら、問題はないんだ」

「ただ、悪い癖が付くので、気をつけるように」

「はい」

了